

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏 名 浦上 麻衣子
 学 位 博 士 (学術)
 学 位 記 番 号 新大院博 (学) 第 83 号
 学位授与の日付 平成 29 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 博 士 論 文 名 レヴィナスにおける主体について

論文審査委員 主 査 准教授 宮崎 裕助
 副 査 教授 栗原 隆
 副 査 教授 番場 俊

博士論文の要旨

浦上麻衣子氏の博士論文「レヴィナスにおける主体について」は、20 世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Lévinas, 1906-1995)の鍵概念である「主体」の形成過程を、初期の論考から代表作『全体性と無限』を経て後期の主著『存在するとは別の仕方』に至るまでたどり直し、その用法に一貫する構造を解明することを目的とした研究である。

第 1 章では、自己同一的な主体を〈他なるもの〉へといかに解放するのかというレヴィナスの問いが、すでに初期論考の時点で登場し論じられているという点について確認される。第 1 節で示されているのは、自我が自己自身に繫縛されているという事実が日常的な現象から明らかになること、また主体がそうした自己同一的なあり方からの逃走欲求をつねに抱えていることである。第 2 節で示されているのは、自己繫縛的な自我が、〈ある〉と呼ばれる非人称的な存在一般のただ中で基体化することによって生じるということである。第 3 節では、基体化によって生じた自己繫縛的な自我という一なる主体が、対面関係における〈君〉やエロスの関係における〈女性的なもの〉といった《他》との対面によって多元性へと開かれていくことが論じられている。

第 2 章では、初期論考において基体化と定位によって生じた自我が『全体性と無限』で《同》として捉えなおされる場合に、そうした《同》としての主体の構造が、享受、家、家における〈女性〉といった観点から検討されている。第 1 節で論じられているのは、レヴィナスのいう「享受」が志向性をはじめとする意識の働きには還元しえずそうした働きに先立つということ、このとき主体が形なき〈元素〉を享受するさなかで《同》として生起するということである。第 2 節で示されているのは、享受において生じた主体が「家」を通じて世界内に定位する過程であり、これは享受から所有へ、〈元素〉から〈もの〉へといった移行を経るものである。第 3 節でまずもって確認されているのは、〈女性〉が、享受によって生じた主体が家へと収束するための条件として提示されていることである。そこから、レヴィナスにとって家の〈女性〉が主体の内部性に関わるのはユダヤ思

想の文脈を背景としているということが論じられている。

第3章で検討されているのは、初期論考における主体を、その自己同一的なあり方から引き離す〈他なるもの〉の役割についてである。この〈他なるもの〉は、『全体性と無限』において《同》に対する《他》として規定され、《同》と《他》との関係のなかで明らかにされていく。第1節ではまず、顔の次元における《他》が、〈師〉という高みと〈異邦人〉という栄光に満ちた低さを意味しているということが確認される。そのうえで、このような《他》が、《同》としての主体における享受や所有といった自己同一的な運動に対する抵抗として現われることが示されている。第2節では、《同》としての主体がエロスの次元において〈愛される女性〉としての《他》との関係でいかにして変容するのかが論じられ、男性性として特徴づけられていたこの主体が、性的な他性である〈愛される女性〉との関係のなかで女性的で柔らかなものへと、すなわち自己とは〈他なるもの〉へと生成するということが示されている。第3節では、『全体性と無限』における顔の次元とエロスの次元との関係について、エロスの次元が顔の次元を補完しているという論点が検討されその内実が解明されている。

第4章では、初期論考と『全体性と無限』で論じられてきた「《同》としての主体とその変容」という問題が、後期著作の『存在するとは別の仕方』でいかに継承されているかについて考察されている。第1節では、それまでの主要な問題が『存在するとは別の仕方』にも引き継がれているが、誇張法によって書き換えられているという点、また誇張法に関わる記述の中にエロスの文脈が潜んでいるという点に焦点が当てられ、その力点の移動が分析されている。第2節では、主に『全体性と無限』における《同》と《他》という枠組みが、『存在するとは別の仕方』においてどのように展開されているのかが検討されている。第3節では、〈身代わり〉という概念のなかに子との類似性を見出すことで、〈身代わり〉と繁殖性とが関係づけられ、本論文が締めくくられている。

審査結果の要旨

レヴィナスの用語法は変化に満ちており、一見すると著作ごとに新たな概念を産出しているように見える。しかし本論文は、レヴィナスの過去の諸概念を一つ一つすりあわせることにより、レヴィナスの思想にひとつの一貫性を浮かび上がらせている。すなわち、レヴィナスの思想は、存在の同一性からの解放という枠組みのなかで問いを保持し続けるものであり、その枠組みのなかで探究される主体が、自己同一的自我を起点に《他》との関係へと開かれることで自己更新し続けるという点で構造的に一貫している。このことを本論文は説得的に証示している。

一方において、本論文は、『全体性と無限』の詳細な読解を提示しており、先行研究に照らして見れば、レヴィナス思想における主体概念の一貫した使用の内実を、『全体性と無限』に即して解明したという点で卓越したものであるとすることができる。

他方において、構造上の一貫性にもかかわらず、なぜ各時期において主体概念に関わる諸概念の語り方が変化したのかという疑問は残り続ける。とりわけ、『存在するとは別の

仕方で』における語り方の変化の意味に関しては謎が多く、本論でその諸様態が十分に解明されたとはいえない。しかし本論を総体としてみた場合、こうした点は、本論の中核をなす『全体性と無限』の卓越した読解が十分に補っているものとして評価することができる。

以上の審査の結果、審査委員会は、全員一致で、本論文は博士論文にふさわしい水準に達しており、博士（学術）の学位の授与に値するものであると判断した。